

春日東塔院の調査

―第477次

1 はじめに

調査の目的 奈良国立博物館の敷地内に所在する春日東西塔跡は、1965年に奈良国立博物館により発掘調査がおこなわれており、遺跡の状況があきらかにされている。今回の調査は1965年の成果をうけて、春日東塔を囲む区画施設の東北隅の様相を解明し、遺跡の範囲を押さえることを目的とした。そのため奈良国立博物館本館（現在の「なら仏像館」）の南東に計219㎡（東区211㎡、西区8㎡）の調査区を設定した。東区は東塔院の東北隅、西区は北門の解明を目的として調査区を設置した。調査期間は2010年11月15日から12月27日までである。

なお、今回の調査は、ともに独立行政法人国立文化財機構に所属する奈良文化財研究所と奈良国立博物館による初めての共同発掘調査となった。

春日東西塔の概略 春日東西塔は神仏習合の影響によって春日大社に建立された塔で、西塔（「殿下御塔」ともいう）は永久4年（1116）に関白藤原忠実の発願によって建立された。一方、東塔（「院御塔」ともいう）は保延6年（1140）に鳥羽上皇の発願によって建立された。しかし両塔は治承4年（1180）に平重衡の南都焼き討ちにより焼失する。東塔は建保5年（1217）に再建され、西塔は宝治年間（1247～1248）に再建されたとされている。再建された春日東西塔の姿は『春日宮曼荼羅図』（奈良市南市町自治会所蔵、鎌倉時代）に描かれる。しかしこの両塔も応永18年（1411）に雷火によって失われ、以後、再建されることなく現在に至る。なお、応永以後、周囲には興福寺の子院である法雲院・観音院・宝蔵院等があり、『奈良町絵図』（江戸中期）によると一乗院の下屋敷があったことが知られる。

（海野 聡）

1965年の調査 1965年の調査は奈良国立博物館の新陳列館（現在の西新館、1972年竣工）建設準備にともなうもので、敷地内の地下遺構の把握が目的であった。その成果は1982年の概要報告書（奈良国立博物館『春日西塔・東塔跡の発掘―殿下の御塔・院の御塔』）で概要を知ることができるが、当時の調査では東西両塔院の全貌解明ではなく、「輪郭を明らかにし、史蹟の範囲を定め、その保存に資せん

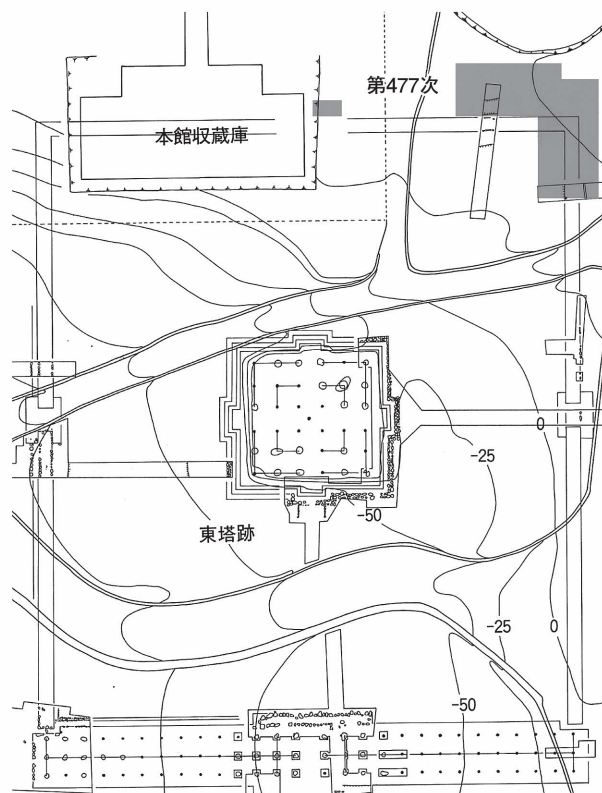


図253 第477次調査区位置図 1:1000

とする」実際的な目標がうたわれている。期間は1965年5月13日から7月25日までの74日間。トレンチ調査と測量に重点が置かれ、塔基壇の一部や門跡など構造把握に必要な部分には調査区を拡張して発掘がおこなわれた。

調査の結果、両塔院は東西と北の三方を築地に囲まれ、春日社参道に面した南方だけは複廊と楼門を備えた区画施設を個々にもつことがあきらかとなった。規模は両塔院とも南北82.4m、東西は西塔院が74.4m、東塔院が69.6mとしている。それぞれの中心に配置された塔基壇は四方に階段を取り付け、凝灰岩ないし花崗岩の化粧石をめぐらせていた。その様子は『春日宮曼荼羅図』に描かれた両塔の姿と一致するものであった。出土遺物は、金銅製の風鐸片をはじめ、巴文軒丸瓦や「西御塔」「東御塔」銘の文字瓦を含む大量の瓦片、土師器皿、瓦器などコンテナ144箱分（概報では木箱55箱分）にのぼる。これらは洗浄、注記、出土地点ごとの分別を経て、当時の図面や写真類とあわせて同博物館に保管されている。

なお、今次の調査に関連して重要なことは、1965年の調査では、東塔院の北限と東限を探るため2本の細長い調査区（幅約2m弱）を設けたが（図254）、築地塀そのものは検出されなかったことである。調査区内に確認されたわずかな石列や落ち込みを、最終的に築地塀の跡と認識したのであり、当時の日誌からも遺構の残りの悪さに苦慮した様子が窺える。

（吉澤 悟/奈良国立博物館）

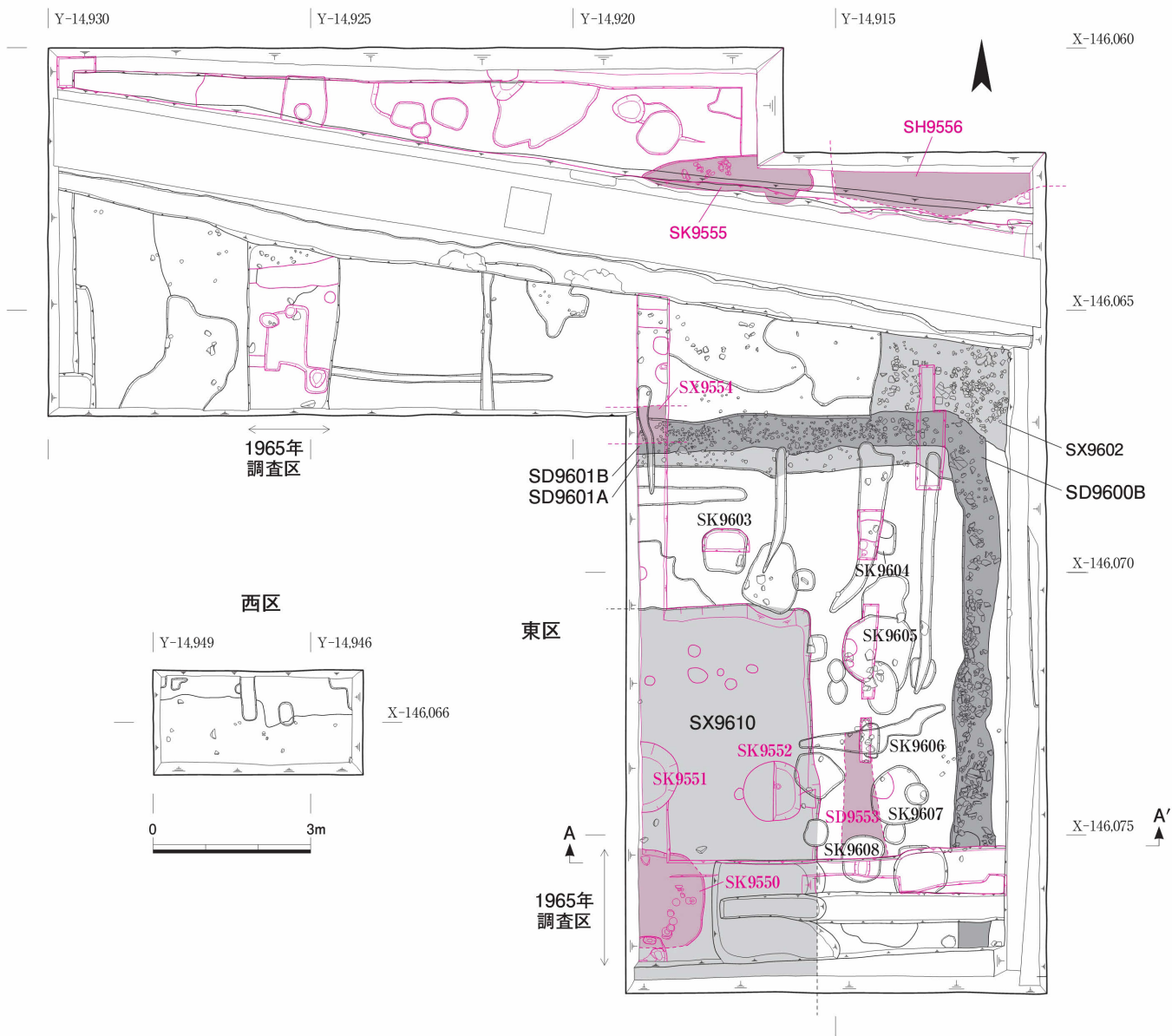


図254 第477次調査遺構平面図 1 : 125



図255 東区全景写真 (北東から)

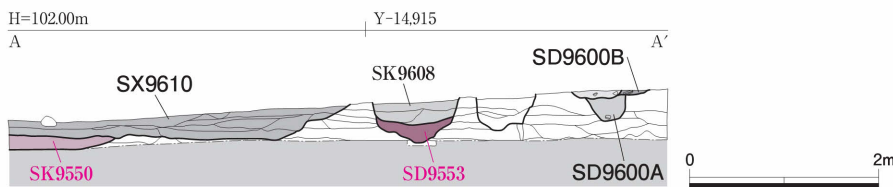
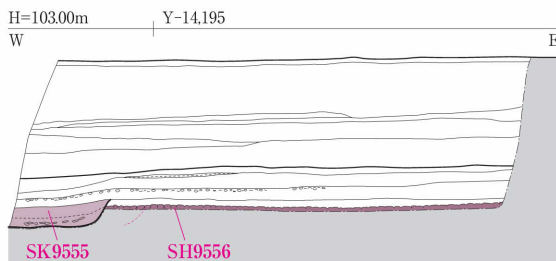
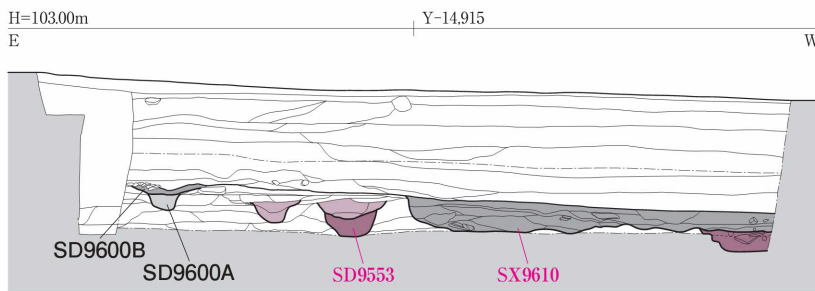
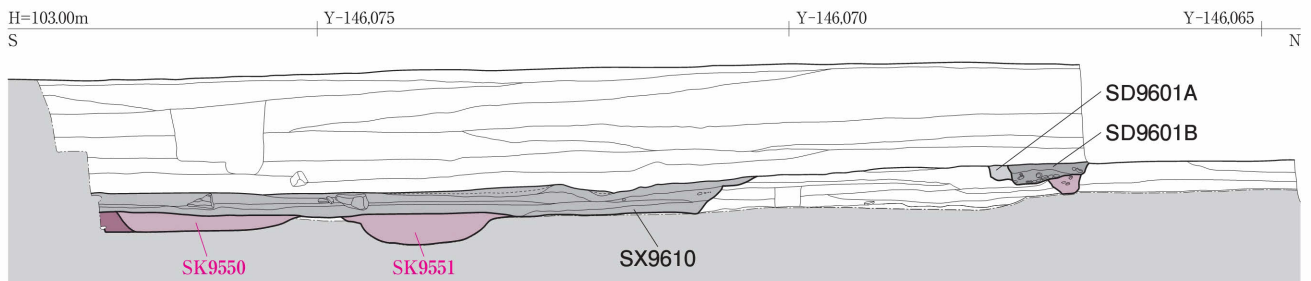


図256 土層断面図 1 : 80 (上から西壁、南壁、北壁、1965年調査区北壁A-A')

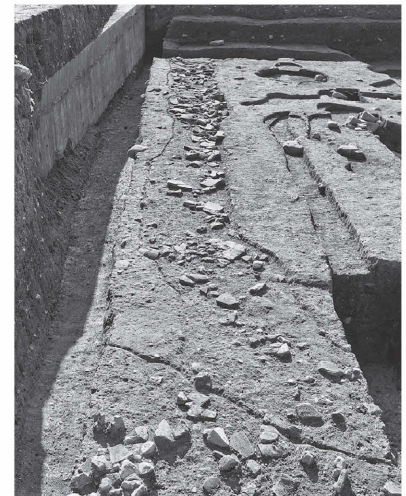


図257 雨落溝SD9600 (北から)

地形と基本層序 調査地は南西に向かい、なだらかに傾斜する地形である。基本層序は地表面より、表土、整備盛土（明治時代）、黒褐色砂質土層、暗オリーブ褐色粘砂土層（ともに近世包含層）、灰黄褐色粘質土層（東塔院遺構を検出）、地山（褐色粘土）の順である。なお近世の包含層から、環状の台座（瓦質製品）の一部や多量の土器が出土した。一乗院下屋敷の頃のものである可能性があるが、この時期の顕著な遺構は確認できなかった。遺構検出は黒褐色砂質土層、暗オリーブ褐色粘砂土層、灰黄褐色粘質土層の上面でおこない、一部、地山面での検出をおこなった。なお北門推定位置では、近世の削平により顕著な遺構は見られなかった。

2 検出遺構

検出した遺構は、大きく東塔院建設以後の遺構（上層遺構）と建設以前の遺構（下層遺構）に分けられる。下層

遺構は調査区北部を東西に通るコンクリートの配管よりも北側部分、落ち込みSX9610の底、および土坑などの断割箇所でのみ検出した。

東塔院関連の遺構

雨落溝SD9600A・B 幅約65cm、深さ約5～20cmの素掘りの南北溝で、約9.5m分検出した。北端はSD9601に接続する。SD9600Bの直下にSD9600Aがあり、瓦を多く含む。東塔院の東面の区画施設にともなう外側の雨落溝と考えられる。瓦は平安時代末から鎌倉時代前半のもので、区画施設の屋根に葺かれていたものと考えられる。

なお1965年の調査では、東塔院西面や南門周辺において、雨落溝にともなう玉石列を検出しており、東面や北面の雨落溝も側石や底石として玉石をともなっていた可能性が考えられるが、今回の調査では確認できなかった。
雨落溝SD9601A・B 幅約65cm、深さ約5～20cmの素掘りの東西溝で、約7m分を検出した。東端は南に折れ

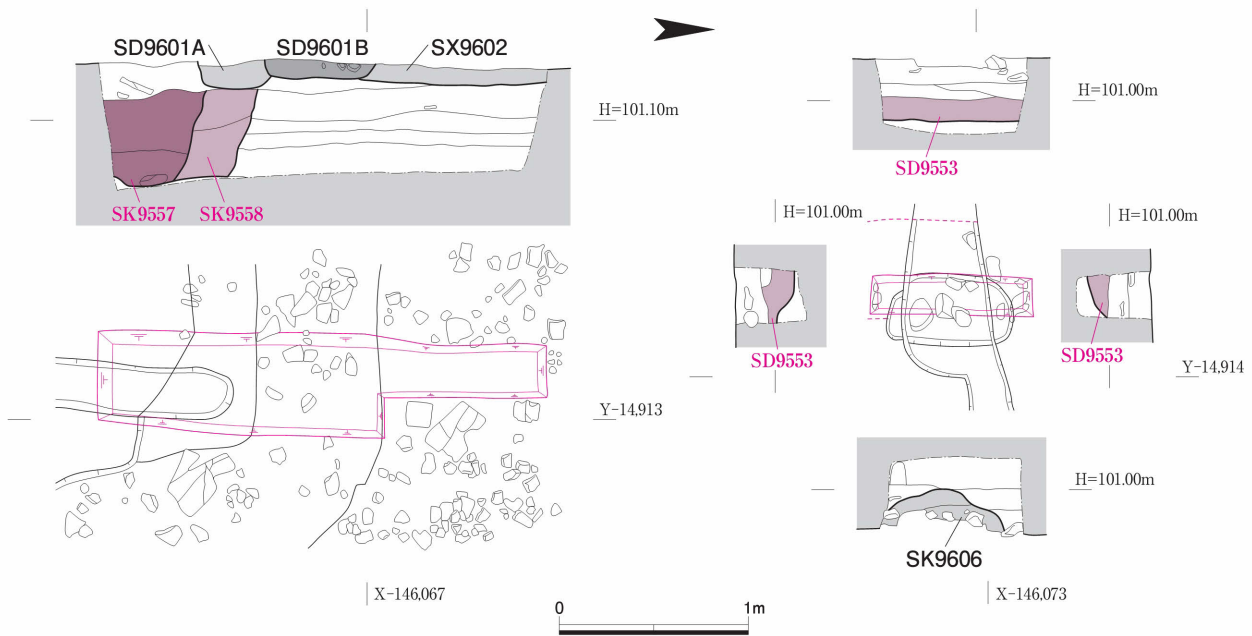


図258 雨落溝SD9601 (左)・SK9606 (右) 平面図・断面図 1:40



図259 雨落溝SD9600A・B断面 (南から)



図260 落ち込みSX9610完掘状況 (下層遺構・北東から)

て、SD9600に接続する。A・B 2 時期の溝が重なっており、瓦・土器・径10cm弱の礫を多く含む。東塔院の北面の区画施設にともなう外側の雨落溝と考えられる。なお、1965年の調査で区画施設の外側の雨落溝と考えた溝よりも約 2 m 南の位置で検出した。

落ち込みSX9610 東西幅約 4 m 以上、南北幅約 5 m 以上、深さ約 25cm の方形の落ち込み。平安時代後期の土器や近世の染付・軒瓦などが出土した。この落ち込みの位置は東塔院区画施設の内側 (内庭部) にあたると想定される。本来あったはずの内庭部は、この遺構により削平されている。この落ち込みSX9610の端部は、東塔院区画施設の内側の雨落溝の輪郭を踏襲している可能性がある。

瓦溜SX9602 東塔院東北隅の雨落溝の外側に広がる幅約 2.4m 以上、深さ約 20cm の瓦溜。SD9601 B に切られる。この瓦溜SX9602から平安時代の軒平瓦が出土しており、区画施設を建て替えた際に瓦を廃棄した土坑の可能性が

ある。

区画施設 区画施設にともなう外側の雨落溝SD9600・SD9601を検出したことで、春日東塔院の東北隅の位置を確定することができた。雨落溝が 2 時期ある点、瓦溜SX9602が区画施設にともなう瓦の廃棄土坑と考えられることから、少なくとも 1 回は区画施設の建て替えがなされたと考えられる。これは治承の焼き討ち後の建て替えと考えられるが、焼土や焼けた遺物などの明確な物証は得られなかった。

区画施設の外側の雨落溝と落ち込みSX9610の間の空間には、築地塀や回廊などの区画施設があったと想定されるが、基壇や掘込地業などの遺構は検出されなかった。基壇本体は後世に削平されたと考えられる。

その他の上層遺構

この他、外側の雨落溝と落ち込みSX9610の間の区画施設想定位置で、土坑SK9603、SK9604、SK9605、

表39 第477次調査 出土瓦磚類集計表

軒丸瓦		軒平瓦		軒棧瓦	
型式	点数	型式	点数	種類	点数
平安	1	平安	9	江戸	1
巴(鎌倉)	4	鎌倉	5	近代	1
鎌倉	2	室町	3	時期不明	1
巴(室町)	1	中世	1	軒棧瓦計	3
巴(中世)	10	江戸	2	その他	
中世	2	時期不明	4	鬼瓦(江戸)	1
巴(江戸)	2			面戸瓦	2
時期不明	3			雁振瓦	1
				麩斗瓦(中近世)	3
				隅切平瓦	1
				刻印丸瓦	2
				伏間瓦	3
				角棧板塀瓦	1
				瓦製円盤	3
				その他道具瓦	13
軒丸瓦計	25	軒平瓦計	24	その他計	30
		平瓦		凝灰岩	
重量		470.941kg		0.481kg	
点数		5073		2	

SK9606、SK9608を検出した。これらの土坑の深さは約10～30cm、底面のレベルもほぼ同様である。そのため、これらの土坑は治承の焼き討ちから区画施設再建までの間に建てられた仮設の掘立柱塀を構成する一連の遺構の可能性も考えられる。ただし、出土遺物から時期を特定することは難しい。

東塔院建設以前の遺構（下層遺構）

南北溝SD9553 幅約80cm、深さ約25cmの素掘りの南北溝(図254)。A-A'の断面およびSK9606の断割断面で検出した。なお、コンクリートの配管掘方の南壁や落ち込みSX9610の東壁において延長部分を確認できない。この溝は土坑状に閉じている可能性もある。

土坑SK9550 落ち込みSX9610の底面で検出した幅約2.2m、深さ約20cmの土坑。完形の土師器皿および瓦器椀が出土した。

土坑SK9551 落ち込みSX9610の底で検出した幅約1.2m、深さ約30cmの土坑。埋土は粘性のある黒褐色土。

土坑SK9552 落ち込みSX9610の底で検出した幅約1.1m、深さ約40cmの土坑。規模・埋土ともにSK9551と似る。

礫敷SX9554 配管の南側、調査区西部の断割部分で検出した南北幅約0.7mの礫敷。調査区の西方に続く。

礫敷SH9556 配管の北側で検出した東西幅約3.7m以上、南北幅約0.8m以上の小粒の礫敷で、調査区の北方に続く。瓦片を含む。

土坑SK9555 配管の北側で検出した幅約3.3m、深さ約30cmの土坑で、11世紀後半の土器を多く含む。埋土がSK9550と似る。

土坑SK9557 SD9601 A・Bの断割断面で確認した下層遺構。幅約90cm以上、深さは約50cm。SK9658に先行する(図258)。

土坑SK9558 SD9601 A・Bの断割断面で確認した下層遺構。幅約55cm以上、深さは約50cm。

下層遺構の評価 今回の調査区において、建物とみられる下層遺構は検出できなかったが、SK9550やSK9555などの遺物を多く含む土坑、および調査区北部の礫敷SH9556を検出した。これらの遺構の存在は東塔造営以前から、東塔院およびその北方一帯を積極的に利用していたことを示している。(海野)

3 出土遺物

瓦 磚 類

本調査区出土の瓦磚類を表39に示した。軒瓦は古代から中世におよぶ(図261)。1は平安時代、2は平安時代の可能性がある蓮華文軒丸瓦。3～8は鎌倉時代の軒丸瓦。3は『興福寺食堂発掘調査報告』(奈文研1959、以下『食堂])の85と同範、4は「東福寺銘」軒丸瓦。表土からの出土であり、本遺跡との関連は不明であるが、東福寺所用瓦には大和産の軒瓦が散見され、当地からの出土も首肯できる。9は室町時代の、10・11は江戸時代の巴文軒丸瓦。11は落ち込みSX9610で出土。12～16は平安時代の軒平瓦。12は『食堂』56と、13は『食堂』58と同範。14は『食堂』70と同範で、調査区全体で3点出土。うち、1点は雨落溝の外側の瓦溜SX9602で出土し、東塔院区画施設に葺かれていた可能性が高い。また、雨落溝SD9600と瓦溜SX9602から出土した軒瓦は、本瓦1点のみである。15は『食堂』77と同範で、調査区全体で2点出土。16は旧大乘院庭園出土瓦と同範品がある。17～21は鎌倉時代の軒平瓦。20は興福寺一乗院跡出土瓦と同範品がある。23～25は室町時代の軒平瓦。23・24はおそらく同型式とみられる宝珠唐草文軒平瓦、25は『食堂』132と同範。26は時期詳細不明の中世軒平瓦。27・28は江戸時代の軒平瓦、29は江戸時代の軒棧瓦。30は江戸時代の鬼瓦の脚外反部。31～36は叩き目を残す中世平瓦。31は「講堂」銘叩きで、興福寺南大門でも出土。33～36は斜格子叩き。斜格子叩き目をもつ平瓦は本調査区で20点、約6.8kg分出土した。36は丸瓦凹面に施印された「東□」銘、37は丸瓦狭端面に施印された小菊文である。以上のように、本遺跡出土の瓦は、興福寺との関連が深い。

(中川あや)

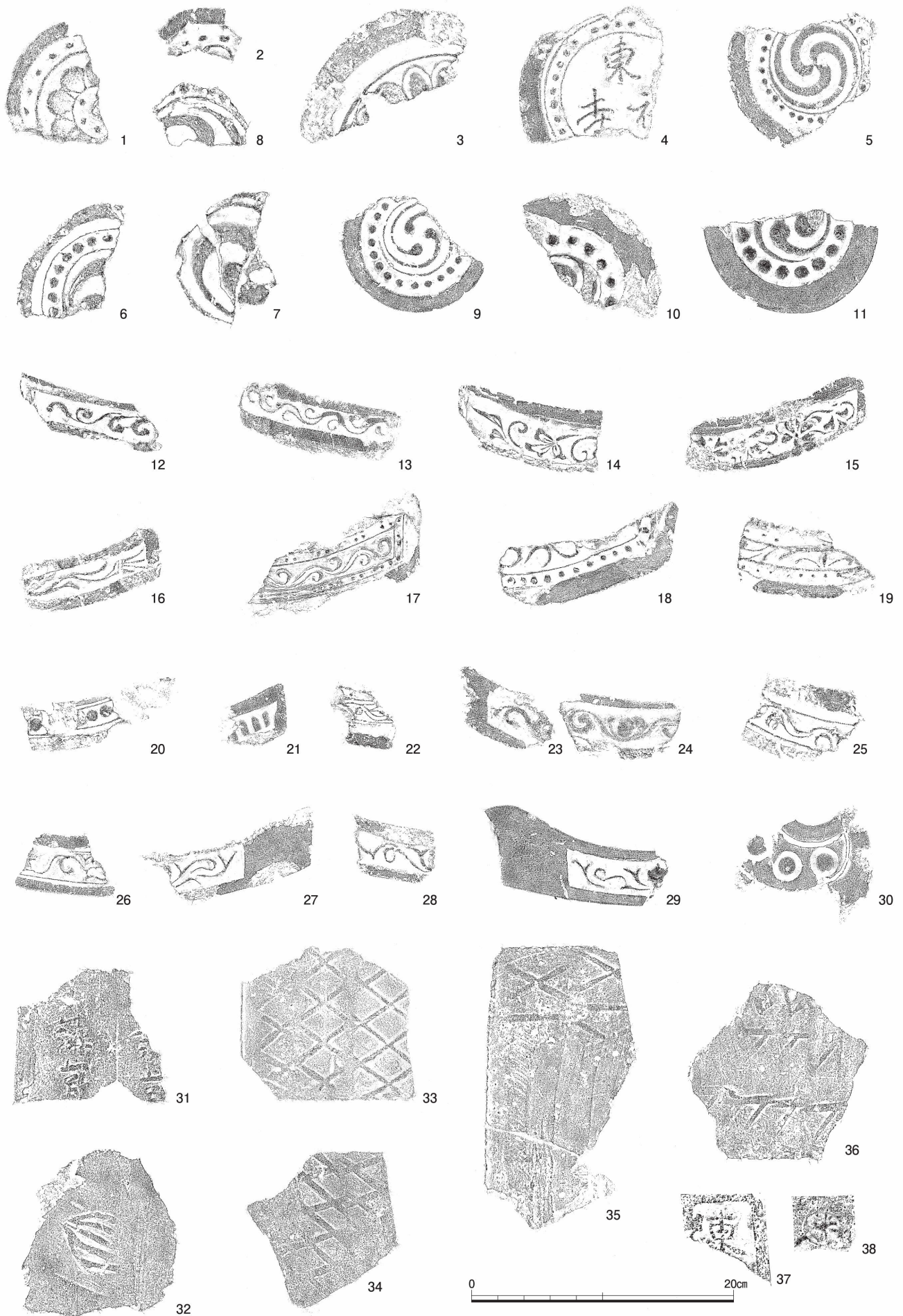


图261 第477次調査出土瓦 1 : 4

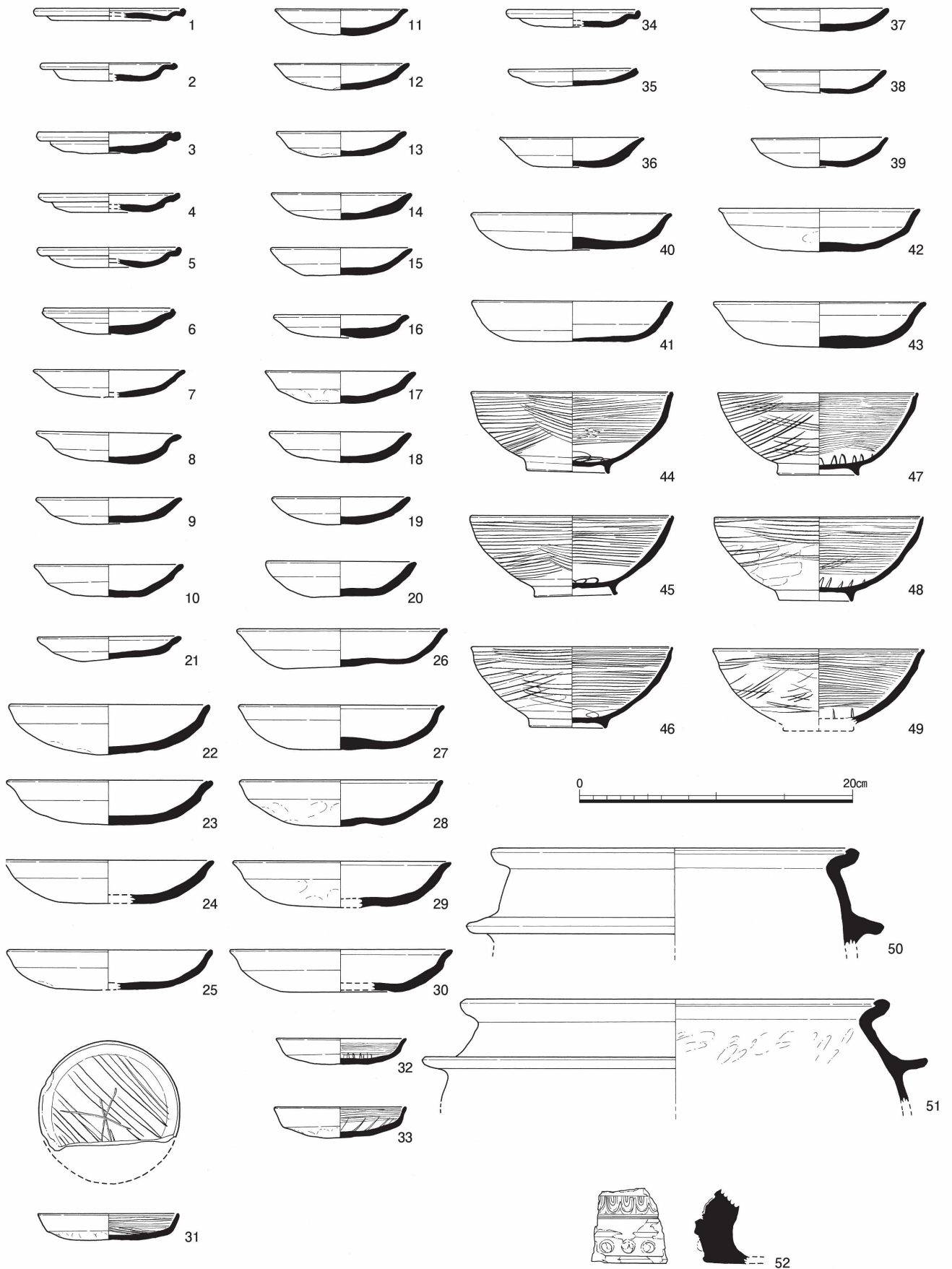


図262 第477次調査出土土器 1:4

土 器

第477次調査では、整理箱で31箱の土器が出土した。これらはおもに灰黄褐色粘質土層や、この土層を掘り込んだ土坑からの出土品で、東塔院造営以前の土器群である。また、東塔院の北面区画施設の雨落溝SD9601からも若干の土器片が出土しているが、これらは土師器細片や須恵器片であり、鎌倉時代から室町時代にかけてのものである。以下、灰黄褐色粘質土層出土の土器を中心に報告する(図262)。

灰黄褐色粘質土層の土器 土師器皿、瓦器椀、瓦器皿、土釜などからなる。1～21は土師器小皿。口径10cm台のものが多い。口縁端部がいわゆる「ての字状」となる個体(1～6)と、口縁部が外反する個体(7～21)とがある。22～30は土師器大皿。口径15cm台のものも多く、口縁部は外反気味である。

31～33は瓦器皿。口径10cm前後で、見込みにはジグザグ状の暗文を施す。31は内面に「*」状の線刻がある。なお図示しないが、瓦器椀には見込みに菊花状、格子状、連結輪状、ジグザグ状の暗文を施したものがある。

SK9550の土器 土師器皿、瓦器椀がある。土師器皿には小皿(39)と大皿(40～43)があり、口縁部が外反するタイプである。瓦器椀(44～49)はいずれもほぼ完形で、保存状態がよい。これらは内外面のヘラミガキが稠密で、内面見込みに連結輪状暗文を施す44～46と、ジグザグ状暗文を施す47～49がある。

SK9555の土器 土師器皿、瓦器椀、瓦器皿、土釜などからなり、器種構成は灰黄褐色粘質土層の土器群に同じ。31～36は土師器小皿で、口径10cm前後である。「ての字状」口縁の個体(34・35)と、外反する口縁部の個体(36～38)とがある。50・51は土釜。いずれも大和B型に属する。

以上の土器は、土師器皿や瓦器の器形などからみて11世紀末～12世紀前半に属し、東塔院造営以前に遡るものである。

52は瓦質製品の一部。外面には横位の圏線をめぐらせて上下を区画し、上段に蓮弁、下段に珠文を配している。蓮弁は3弁が、珠文は3顆が完存する。内面はヨコナデで整え、底面は平坦に仕上げている。環状の台座の一部とみられるが、時期・用途はあきらかでない。調査区東北部の黒礫土(近世包含層)の出土。(森川 実)

4 ま と め

今回の奈良文化財研究所と奈良国立博物館による共同発掘調査を通して、以下のことをあきらかとすることができた。

春日東塔院の東北隅の確定 今回の調査によって、春日東塔院の北面および東面の区画施設にともなう外側の雨落溝を検出し、春日東塔院の東北隅の位置が確定した。外側の雨落溝には多数の丸瓦や平瓦が埋没しており、区画施設の屋根には瓦が葺かれていた可能性が高いと考えられる。L字形に折れ曲がる外側の雨落溝と瓦の出土状況は、『春日宮曼荼羅図』に描かれている東塔院の姿を彷彿とさせる。

また春日東塔院の区画施設の内側部分については、近世の落ち込みによって大きく削平されていたが、その輪郭は区画施設の内側の雨落溝の肩を踏襲している可能性がある。

東塔創建以前の様子 春日西塔造営に際しては、塔造営予定地は樹木を切らずに建てられる場所としたとする史料がある(『中右記』天永3年6月17日条)。今回の調査で東塔造営よりも古い時期の遺構を検出したことによって、東塔院およびその北方周辺の一帯が、塔造営以前にすでに積極的に利用されていたことを発掘調査によって初めてあきらかにすることができた。

今後の課題 今回の調査では解明できなかった課題として、治承4年(1180)や応永18年(1411)に東西塔が焼失した際に、塔のみではなく、塔を囲む区画施設も同時に焼失したのかどうかという点があげられる。外側の雨落溝が2時期ある状況からみて、区画施設は建て替えられた可能性が高いと考えられるが、区画施設の構造の変更(回廊から築地塀への変更など)の有無も含めて、今回の調査ではこの点に関する明確な証拠は得られなかった。区画施設の焼失・再建の実態を解明することは今後の課題である。

また今後、春日東西塔一帯の遺跡の保存を進めていくには、今回の発掘成果と1965年の発掘成果を総合的に検討する必要がある。そのためには現在、露出している礎石の位置を実測し、以前の調査遺構の測量上の位置確認が求められる。これらの点については、今後の調査の進展を待ちたい。(海野)